

海賊と山賊、あるいは善哉と酒

安 森 敏 隆

いつの頃からか、杉野徹先生は海賊で私は山賊になっていた。これは、2人の中での親しい呼び名であり、また親しい相手に紹介する時には、杉野先生が「海賊」になり、私が「山賊」になっていた。それは杉野先生が、かの有名な瀬戸内の「生口島」^{いくちじま}の生まれで少年時代を過ごされ、私が備後の霧深い「三次」^{みよし}の生まれで少年時代を山国で送り、ガキ大将であったことを誰よりもよく知っていたからである。

山口の宇部にある短期大学で初めて先生にお会いした。まことに素朴でやさしい笑顔が印象的であった。先生は新任の私の前に旧知のごとくすうーと歩み寄られ、宇部での過ごし方や宇部短大のことや教会（緑橋教会）での過ごし方などを親切に教えてくださり、家族同士の付き合いをしてくださった。後から、私も所属した緑橋教会の陣内厚生牧師から聞いた話によると、ある日、先生はふらりと教会の玄関に下駄履き姿で訪れ、

「何かすることはありますか」

と気楽におっしゃり、そのまま教会員のように毎週、家族で礼拝に訪れ、バザーや色々の御奉仕をなさったということである。私が教会に行った頃、先生には、「仁（じん）君」と「玄（はる）君」という1歳と2歳くらいになれる坊ちゃんがおられて、教会中を走り回って人気者でもあった。先生はいつも他の子供たちとともに、2人のお子様を優しく見守り、またよくお世話もされていた。

それからまもなく先生は同志社大学にお帰りになり、私は下関にある梅光女学院大学に赴任した。このわずか1年間の宇部での出会いが、かくも私たちの長いお付き合いの原点になろうとはその時には思いもよらないことであった。

同志社大学に帰られた先生とはその後、私が京都での学会や短歌の会など、

また妻の実家が京都でもあり、京都に滞在することも多く、そんな折に家族で先生宅にお邪魔させていただいたりしたものである。一方、下関の大学へ赴任した私は、日本海や関門海峡を見渡せる大学の洒落た「六角堂」というレストランに週2回、東京から来られる英文学科の大学院の特任教授で評論家の磯田光一先生と談笑しながらコーヒーを飲み、お話が聞けることを楽しみにしていたものである。当時、問題を投げかけていた梅原猛の『水底の歌』や遠藤周作の『スキャンダル』が話題になったり、作家の司馬遼太郎や井上ひさし（先日亡くなられたばかりである）さんが、大量に本を山積みして買い集めているのに、昨日、神田の古本屋で会って来たと言、いう具合に、いつもホットな文学やジャーナリズムの最前線の話がリアル・タイムで展開され、色々の話が聞けてとても楽しかった。

そうした中で、「日本英文学会」の話なども出て、私の畏友の中央大学で英語の先生をしていた川口紘明君の話や同志社女子大学に設置されているミルトン学会の話もよく出た。そうした折々、同志社大学に帰られた杉野先生が、九州や山口の大学で学会があるときには、私の下関の家にもよく立ち寄ってくださった。その頃であっただろうか、私の大学時代からの畏友で、塚本邦雄や寺山修司などと親しくシンポジウムやコロキウムをしてきた歌の仲間で、ロマン派の研究やT. S. エリオットの研究家である、先に記した川口紘明君が、中央大学で「日本英文学会」の事務局長をしていたころ、学会で杉野徹先生とお会いになり意気投合され、うれしい3人の友情が生まれたことである。この川口紘明君は酒が強く、大学時代に私とつくった同人誌「幻想派」（京都大学教授で歌人の永田和宏君ら20名ばかりの学生がいた）の時代、川口紘明君を迎えて飲み明かしたものである（妻が翌朝、ビール瓶を整理していたら33本の空き瓶があったという）。16・7本ばかり一人で飲んだことになる。

10年ばかりして私も同志社女子大学に赴任して来ると、すでに同志社大学の方から先生は女子大学の方に移っておられ英文学科で活躍しておられた。

ある時、祇園の小料理屋で会が終わった後、飲み物なら何でも注文していいと言うことになり、杉野先生は一人「善哉（ぜんざい）」を注文された。すると、さすが祇園の女将「あんたはん、なんと一番オツなもの注文しやほるわ」と言って、即座にアズキを取り寄せて「善哉」をつくって出されたものである。それから、飲み屋に御一緒するたびに「善哉の杉野先生」と呼ぶことにしている。

思えば、「海賊」と「山賊」、「善哉」と「お酒」、このアンビバレンスが私たちの絶妙の関係を織りなしてくれたのかもしれない。

先生との同志社女子大学での昨年の1年間は、なんとという僥倖に恵まれたことかと思う。田辺校舎から英語英文学科も日本語日本文学科も、今出川校舎に動くことになり、楽真館の5階の比叡山と大文字のよく見える隣同士の研究室になった。思えば、蜜月のような1年間であった。先生の研究室には、いつも卒業生や外部の訪問者や学生でいっぱいであった。その中の一人の、「隈本栄子」さん、という卒業生の方を紹介していただいたことも忘れ難い。氏は英文学科の出身であるが、学生時代には、60年間今も続いている「シェイクスピア・プロダクション」の原語劇で主役を演じ活躍されたことは仄聞していた。

氏は歌誌「塔」に所属する歌人で、『なんでもない日』（青磁社・2009年5月9日）という1冊の歌集が最近出されたばかりである。「二〇〇五年三月末、京都大学を定年退職。三十八年間の職業生活を終えました。二人の子（娘と息子）は結婚し、娘には二人の孫ができました。好きな歌舞伎、京舞の舞台を楽しみ、長唄の稽古をはじめ、友人達との旅行と、ささやかな幸せを楽しんでいました」と「あとがき」にある。その中に、杉野先生からも聞いていたことだが、こんな歌があった。

送り火の次の日に来た事実なりふいに現れ受け入れるだけ

（『なんでもない日』）

噴き上がる不安の声に耳かせば泣くしか他にないではないか

(同)

おかあちゃんと幼子になり呼んでみる七回忌終えて同じ病に

(同)

ある日、思いもかけず自分の身が病に冒されていることを知るようになるのである。「二〇〇七年の八月、母と同じ病、肺がんに罹っていることが、しかも進行した厳しいステージであることがわかりました。生きるにも病むにも体力、気力がある日々となりました」(あとがき)とある。今、まさに告げられた「いのち」の現実を受容しようとし、不安の声に泣き、幼子になって亡き母に呼びかける。自己の命の現実にま向かうぎりぎりの声がヴィヴィッドに、ここから聞こえてくる。ここには、「うた」の根源である「いのちのこゑ」が、しっかりとうたいこめられている。私は早速、月刊誌「NHK短歌」の「いのちを見つめる」で取り上げさせていただいたことであるが、杉野先生がいかに多くの学生のみならず卒業生の方々にも厚く信頼され、支えとなっておられるか、感じ入ったことである。

また、先生には、「SEITO 百人一首」の英語の選者もしていただき、私の母校である「三次高校」にも、わざわざ「英語短歌」の実作指導にも行っていただき、まことに感謝している。

今年の3月の終わり、先生が引っ越しなさる最後の日、竹村先生や寺川先生と、研究室の本などの荷造りや包装のお手伝いをしたことがある。ここでも、先生はいつものように、包装や梱包や掃除を自分でなさり、私は「セロテープ」をひとつ、ひとつ切って先生の手へ渡しながら、お話をすることぐらいいかできなかった。ところが、4月になって学校に行ってみると、大いに喜ばれて先生がとても大切にして愛用されていたお茶のセットや、足を温める温風機などを「安森先生へ」と書かれて、私の研究室の前に置いてくださったのである。私が、中国山地の山国の三次出身で寒がりであることと、お茶の好きなこともよく知っておられたのである。

山賊の私は「酒」を好み海賊の先生は「善哉」を好み、おおいに楽しみながら研究を続けて今日までこられたのも、杉野先生のおかげである。これからはば広く多くの方々の支えとなってお働きになられることであろう。また、「善哉」と「酒」でたびたび話し合いたいものである。

過ぎ越しの	(すぎこしの)
遥か遠くに	(はるかとおくに)
見ゆるもの	(みゆるもの)
優しき瀬戸の	(やさしきせとの)
生口の島ぞ	(いくちのしまぞ)

敏隆